

エポペ十周年記念

お・め・で・と・う!!



カトリック東京大司教区長

白柳誠一



大司教館の隣りの司祭の家にネラン神父が住むようになってから一年以上になります。

冬の寒い日の夕食後、私達が暖かく静かな休憩室に集まり、夕刊を読んだり、テレビの番組をみて、今日はこれから何を見て楽しもうかなどと気軽に話し合っている頃、ネラン神父がおもむろに巨体をあげ、だまっ「部屋を出ていきませう。思わず、「神父様今晚は寒いからお休みになつたらいかですか」という言葉がつい口元まで出てくるのを、はっとして止め、「御苦労様、気を付けて行ってらっしゃい」と元気に声をかけて送り出す。

ネラン神父が仕事を終えて帰ってこられるころ、勿論私達は静かに休んでおり、誰も迎えに出ることもありません。どんなに遅く帰宅されたのか解らないけれども、毎朝八時半大司教館の食堂に皆が顔を合わせる時、ネラン神父も「おはようございます」と元気のよい声をあげて入ってきます。

ネラン神父の生活のほんのひとこまにすぎませんが、エポペ十周年を支えるうえで私にとつては、毎日くりかえされる最も印象深いことなのです。大司教館と歌舞伎町をつなぐ交通がもつと便利にならないものか、もつと近くにあればとかいろいろ考えるのですが、ネラン神父は、あまり気になさっているようにはみえないのです。願わくは、神父様が御元気で、健康のゆるす限り、歌舞伎町のエポペ通いが未永くつづけられますよ

うに。

ネラン神父の華麗なる冒険を背後から支える人々が同じ祈りを持つて見守っています。私としてはいつも感じていたことなのです。が、神父様の御苦労にとつて代ることはとても出来ませんが、せめてもう少し神父様の話相手として、たとえお酒が入らなくても、対等にお話しできたらなと思つています。

大司教館の神父達の食卓での話、が、どうしてこう「プロ野球、特にジャイアンツが勝つか負けか」の話になるのか、ネラン神父には理解しかねることでしょう。

エポペのお店に時々顔を出してみて感じることは、お店にくる人々への気心の細かい配慮が撤がしていることです。トイレの壁まで総動員されているようですが、やはりとりわけむずかしいのは、話の種とかテーマではないでしょうか。まさにエポペの場合は、日本のサラリーマンとの接点を求めてというところにポイントがある訳ですから、いつもジャイアンツの話にとどまっているという訳にはいかないと思ひますし、またさうかと言つて、本当に真心からの配慮がなければ、人々の心はとも開かないでしょう。

の方がどのように話を深めていくプロセスに加わっていくのか、私はネラン神父ならではのこれらの秘話、苦労話を聞きたいと思つていますし、おそらく神父が歌舞伎町でバーをやっていると聞いて驚いた日本の様々な人々、特に宣教の任務をになう司祭、信徒には、この華麗なる冒険に深い関心を持つものとして、私と同じように考えておられると思います。

ネラン神父と神父を支えるエポペのスタッフの皆さんの成功と失敗は、確かに日本に於ける福音宣教の最前線の出来ごととして、貴重な体験です。十周年記念のお祝いとともに、私はこの貴重な体験が、日本の教会を更に豊かにし、深めるものとなりますようにと心から祈っています。

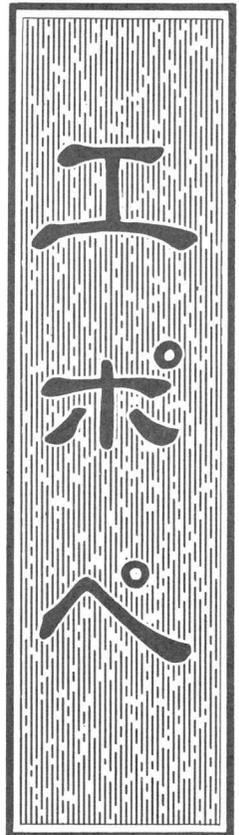


★お知らせ★

真生会館でのミサは六月十七日より、聖書研究会は六月二十一日よりお休みし、九月より再開いたします。詳しくはエポペニュース秋号でお知らせします。

白柳大司教 来店!!

ここにも教会が広がって生きている



1986年 5月30日 発行
 発行所 (株)スナックエポペ
 〒160
 東京都新宿区歌舞伎町
 1-2-8
 第2ウイザードセブン4F
 ☎ (03)232-8363
 発行人 G・ネラン
 頒 価 100円

東京の不夜城といわれている新宿の、特に日本中の盛り場の元祖とも目されている歌舞伎町で、世俗にうといカトリック司祭が、酒場をひらく。話のついでに出ることはあっても、夢のまた夢という企てを実現しようという話を聞いたとき、本当に本気なのかといふが、いぶかしく思ったものでした。(ごめんなさい)

石のうえにも三年といひます。それがすでに六年。一年続く店はまだいほうで、何か月毎に代が替わるといわれている新宿で、六年間という年月は、それだけで、大きな実績だと思ひます。毎日が戦争ですと、いつか新聞記者のインタビュに答えていました。が、ネラン師をはじめ、エポペを支えているスタッフや後援者の方々のご苦勞を、この紙面をおかりして、借越ながら、労りたいとおもひます。教会には二つの面があります。それは、じつと待っている面と、積極的に出て行く面です。これは車の両輪にあたるもので、どちらも大切で、また、バランスがとれていなければなりません。小教区にあって、いつ訪れてきても求道者を暖かく迎え、信徒の要請に応じてゆく司祭と、小教区にこだわらずに、求道者や信徒のそばまでかけてゆく司祭、宣教師、修道者、これからの時代、ますます、こ

祝福の メッセー ジ エポペ 6周年 おめでと

東京大司教
白柳誠一

の両者の協力が必要になってきます。また、この両面に携わっている司祭、修道者、宣教師が、互いの経験をわかちあうということもどれほど大切になってくることでしょうか。

さて、ながく学生たちの相談相手としてネラン塾、真生会館などで尽力し、また、一方では、神学者として、数多くの著書を著しているネラン神父様が、サラリーマンの本音に接し、その魂の乾きの癒しに何か力になりたいという熱意を、エポペの型で実現していただいことに敬意をあらわしたいと思ひます。すでに、何人かが信仰に招かれ、秘跡の恵みに与っていらつしやるものうかがっています。神父様のなさっていることを思うとき、そこにも教会が広がって生きているという気がして、喜びに堪えません。教会は、このような創意工夫と、血こそ流さないけれど、死ぬ思いでなされる苦勞のうえに、拡がってゆきます。これからは、私どもにはわからない困難が待ち受けていることでしょうか。しかも、その困難は天の国のみで報われるものでしょう。どうか、お身体を十分に大切になさってください。酒のみが増えるのはいけないのでしようが、これを通して福音が伝えられるなら、神様も片目をつむってくださいませ。